

## 民国初期における江蘇省立水産学校の 人材育成への模索

楊 峻 懿

はじめに

日本においては明治後期、政府が水産業の振興を主導し、1897年の「遠洋漁業奨励法」の頒布<sup>1)</sup>、新たな漁業技術を開発するための水産巡回講師による漁業技術の指導や普及<sup>2)</sup>、各地における水産講習所や水産試験場の設立<sup>3)</sup>などを通して、漁業権益の拡大、日本漁場の開拓、漁船の動力化・大型化を実現するようになった<sup>4)</sup>。同時期に、明治政府が行なった内国勸業博覧会および水産博覧会も水産振興の一環である。多くの研究者に注目されていないが、大阪で行われた第5回内国博覧会は中国漁業近代化の覚醒と萌芽に直接的なインパクトを与えた。

1903年に大阪で行われた第5回内国勸業博覧会は、日清戦争の後に開催された最新の内国勸業博覧会である<sup>5)</sup>。戦敗の影響を受け、当時少なくなからぬ中国の知識人や実業家の間で日本への視察のブームが起こった<sup>6)</sup>。実業界の重鎮である張謇も1903年に日本を視察し、彼の日記を通してわかるように、大阪に赴いた際に、第5回内国勸業博覧会および大阪鉄工場を視察した<sup>7)</sup>。同博覧会で川崎造船所や三菱造船所は造船事業全般にわたる貢献があると称賛され、最高賞の名誉金賞を受賞した<sup>8)</sup>。日本の発達した水産業を見た際の彼の驚愕は想像に難くない。彼は帰国後、1904年に江浙漁業公司を創設すると、1906年に4名の学生を官立水産講習所へ派遣し、水産知識を学ばせた<sup>9)</sup>。

筆者は前稿において北方の天津に所在する直隸水産講習所（1910年創設）の水産教育の展開、水産人材の育成、および学校の改組を明らかにしたが、南方の水産教育がいかに展開したのかは課題として残された。1908年～11年に江浙漁業公司が派遣した中国水産事業の開拓の使命を担った4名の学生は続々と帰国し、母国中国において江蘇省立水産学校<sup>10)</sup>の創設に取りかかることになる。漁業に関する先行研究の中で、例えば、李士豪・屈若奉『中国漁業史』<sup>11)</sup>、『中国水産事業簡史』<sup>12)</sup>、『中国漁業』<sup>13)</sup>、『中国海洋漁業簡史』<sup>14)</sup>、従子明・李挺『中国漁業史』<sup>15)</sup>などは江蘇省立水産学校に関して基本的な情報を紹介した。しかし先行研究の中では、留日学生の帰国後の水産学校の運営や彼らによる水産人材の育成などに関する詳細についてはこれまで十分に検討されることがなかった。江蘇省立水産学校に関して本格的に取り組んだ研究はほとんどないため、今後の研究に俟つ部分が少なくない。

本稿では、主に上海海洋大学檔案館所蔵の上海檔案文献遺産である『江蘇省立水産学校之刊第一刊』<sup>16)</sup>や『江蘇省立水産学校記念冊』<sup>17)</sup>、また『申報』など新聞・雑誌を利用しながら、1912年に留日水産人材が創設した江蘇省立水産学校（現在の上海海洋大学）を取り上げ、水産人材の育成

状況、水産教育の普及のあり方を分析してみたい。また、1920年代に突如として沸き起こった「水産風潮」と呼ばれる事態、水産教育上の問題などについても検討を加えたい。これらの分析を通じて、民国期における南方の上海に所在する江蘇省立水産学校の教育事業の展開や人材育成の様子を明らかにする。

## 一 留日水産人材の帰来と江蘇省立水産学校の創設

### (一) 日本の農商務省水産講習所への人材の派遣

張謇を代表とする清朝政府の高級官僚は、水産学校の設立、水産人材の育成の重要性を意識していたが、当時、中国には水産人材が全くおらず、教師の欠乏が中国の水産教育事業の始まりを妨げる最も大きな原因であった。そこで江浙漁業公司によって日本農商務省水産講習所に派遣されたのが張鏐、李士襄、曹文淵、胡濬泰<sup>18)</sup>であった。

農商務省水産講習所が出版した『水産講習所一覽』から中国人と考えられる人名、および卒業年度、専門を整理したのが表1である。清末の1911年までに合計11名の中国人が農商務省水産講習所を卒業した。これら農商務省水産講習所に留学した第一陣の中国人は水産教育の先駆けとなり、大多数が水産業・水産教育界の中核になった。

農商務省水産講習所の最初の中国人の留学生は黄桂芬である<sup>19)</sup>。農商務省水産講習所の学制によると、当時の専修科目の学制は1年であったため<sup>20)</sup>、黄が1902年に水産講習所に入学したことがわかる。彼がどのように水産講習所を知ったのか、あるいは誰の紹介によって入学できたのかは知りたいところであるが、中国側には彼に関する史料が全くなく、民国期の新聞・雑誌にも彼に関する記事はない。一方、1905年に刊行した『水産講習所一覽』の中で、彼の卒業動向が「自家経営」<sup>21)</sup>として記されていた。これまで入手した史料を見るかぎり、「自家経営」と記されたのは黄のみであり、残念ながら詳細はわからない。

日本の農商務省水産講習所の卒業生の中で、最初に水産教育界で活躍したのは陳非と王文泰である。2人とも日本で初めて製造と漁撈を学習した中国人であり、ともに帰国後には中国最初の水産学校である直隸水産講習所の製造・漁撈科の教員を担当した<sup>22)</sup>。表1の農商務省水産講習所に留学した11名の清末の留学生の中で、2名が缶詰の製造、6名が製造科、3名が漁撈科を学習していた。これは実業を重視した清末社会の状況を反映したものと考えられる。漁撈に対する意

表1 1903年～1911年官立水産講習所を卒業した中国人留学生

| 氏名   | 黄桂芬   | 趙楣    | 陳非    | 曹文淵   | 王文泰   | 孫英    | 張鏐    | 林元良   | 李士襄   | 伍正名   | 胡濬泰   |
|------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 卒業年度 | 1903年 | 1906年 | 1908年 | 1908年 | 1910年 | 1910年 | 1910年 | 1911年 | 1911年 | 1911年 | 1911年 |
| 専門   | 缶詰    | 缶詰    | 製造    | 製造    | 漁撈    | 製造    | 製造    | 漁撈    | 漁撈    | 製造    | 製造    |

水産講習所編、1912年まで発行された各年度の『水産講習所一覽』により作成。

識は依然として低く、同時代の日本と比べると、沖合・遠洋漁業などに注意が払われていない点を指摘できる。

後に江蘇省立水産学校の教員を担当した張鏐・李士襄・曹文淵・胡濬泰は、帰国後に第一世代の水産人材として、どのように次世代の水産人材を育成したのか。中国の水産業・水産教育にいかなるインパクトを与えたのか。とりわけ、校長を務めた張鏐を中心に、水産人材の帰国後の活動および江蘇省立水産学校の創設過程を見てみよう。

## (二) 張鏐と江蘇省立水産学校の創設

1909年7月、張鏐は講習所を卒業すると<sup>23)</sup>、帰国後早々に江蘇省立水産学校の創設に取りかかった。1922年は江蘇省立水産学校の創設後10周年にあたり、それを記念して出版された『江蘇省立水産学校記念冊』の「序二」には、校長張鏐の手になる水産学校の創設経過および計画が記載されている。

1912年、私は江蘇都督程德全<sup>24)</sup>の命令を受け、水産学校の創設を準備した。当時の江蘇省の教育行政を司るものにとっては、水産学校の創設は破天荒の事業だと思われ、資金も十分にあった。ゆえに2ヶ月で準備し、学生を募集した。また、学校を開設して3ヶ月で校舎を建てた。4年間のうちに漁撈・製造両科の設備を完備させ、6年目から養殖科を増設しようと思ったが、不幸にも多くの問題に遭い、後任の江蘇省の教育行政担当者も維持のために努力したが、資金にも限りがあり、張鏐ももとの計画を犠牲にせざるを得なかった。今の設備を整えることができたのは、もとよりすでに省政府の努力によるものである<sup>25)</sup>。

この文章を通して、江蘇省立水産学校の創設初期の苦難がしのばれる。準備してからわずか2ヶ月で学生の募集を開始しており、人材育成の緊急性が看取される。教育課程の整備については、江蘇省立水産学校も日本の農商務省水産講習所を模倣し、漁撈・製造・養殖の3科を設置しようとしたが、資金の不足などの制限で、計画どおりに進めることはできなかった。

また、教員に関しては、張鏐以外の3名の留日水産人材は江蘇省立水産学校の創設後、ただちに教職に就いたわけではない。水産学校は1913年1月から授業を始めたが、製造科の主任である曹文淵は1914年8月になってようやく教員を担当しはじめた<sup>26)</sup>。一方、漁撈科の専門教員は空席のままであった。校長の張鏐は漁撈専門の人材を招き寄せるために何度も農商部と協議し、漁撈の人材の派遣を求めた。

本校が本科の第1年を開設した際に、漁撈科や製造科がそれぞれ主任を配置するはずであった。当時、我が国の水産人材は南京〔の農商部〕において在職し、校長〔張鏐〕は何度も手紙で協議したが、すべて農商部の事務が重要であるという理由で断られた。第1年の授業科目は水産の基礎分野である。校長が製造科の主任〔曹文淵〕と分担した。しかし、瞬く間に

第2学年が始まり、課程は重要であり、かつ実習も多いため、早急に〔漁撈科の〕主任を招聘し、科目を分けて教授する。絶対に校長らが兼任することはできない。これは本校の漁撈科主任の職位を増設しなければならない理由である。もし人材を求めるのが困難で、〔漁撈科主任を〕さらに創設しないのであれば、漁撈科は形骸化した科目となってしまう。……我が国の水産業への重視はようやく始まったばかりであり、江蘇省においてはこの人材がとりわけ欠乏していることをどうか考慮していただきたい。水産人材の養成のために、現任技士の李士襄に本校の漁撈科主任の職に転属してもらおうよう農商部に相談するのを許可していただけないだろうか<sup>27)</sup>。

水産学校創立後、1年を経ても、漁撈科には専任教員がいなかった。表1をみると、当時、農商務省水産講習所に留学した経歴がある漁撈科の水産人材は3名しかいなかった。江蘇省立水産学校のみならず、当時、北方の直隸水産講習所漁撈科でも人材が欠乏していた。王文泰は1911年初年から1912年8月まで、直隸水産講習所の教員を担当したが、後に辞職し<sup>28)</sup>、同年11月から日本人教員を募集しはじめた<sup>29)</sup>。江蘇省立水産学校は、創立2年後の1915年1月1日に、漁撈専門人材李士襄がようやく水産学校に着任し、1月4日から新学期が始まったのであった<sup>30)</sup>。

### (三) 人材育成の目標

水産人材の育成目標に関して、江蘇省立水産学校の創設初期において、張鏐は「本校五年間の計画書」の中で次のように述べている。

本校は甲種水産学校として、水産上の学理を教えたり、実験の技能を研究したりするところである。おそらく経済を興すには、まず製造業を重視しなければならない。しかし、我が国の沿海7省の漁業従事者は漁業に関する規則・方法に固執して改善しようとしな。輸入品量は日々増えてきて本国製品の販売は難しくなり、権益は外部に流出するようになり、大変に遺憾なことである。ゆえに製造業の子弟および製造業に従事する意欲がある人に漁業に関する知識を教える<sup>31)</sup>。

このように江蘇省立水産学校は、農商務省水産講習所の「本所ニ於テハ水産ニ関スル学理及技術ヲ教授ク」<sup>32)</sup>という規定を模倣したといえる。製造業者の意識を変えたり、製品の輸出を促したりするために、製造業の子弟および経営に従事する希望者に水産学校で知識を教えたのである。実際に1912年（民国元）から15年までの間に、中国における水産品の輸入高は輸出高の7～10倍<sup>33)</sup>にも達しており、こうした背景があったからこそ、政府が製造業の重要性を強調し、創設初期の江蘇省立水産学校においても製造業が重視されたと考えられよう。また育成する人材の水準については、次のように記されている。

将来本校を卒業する学生が、ただ甲種実業の水準に達するのみでは、卒業後に事業にあたって、その知識と学歴は実際にとっても使い物にはならないが、かといって低レベルの工頭や水夫長などの職務に就かせるのもよろしくない。……ゆえに私は学校の計画については、まず専門科目の基礎を確立し、その後、専門的な水産人材を育成すべきであると考えていた<sup>34)</sup>。

ここでは、江蘇省立水産学校を甲種実業学校の教育計画に照らして発展させたとしても、育成された学生の水準は高くないため、将来の水産事業に役立つ、より高いレベルの人材の育成が水産学校設立の目的であったことが述べられている。注目しておきたいのは、現場の漁民子弟に最新の水産知識を教えることが当時の学校の水産教育の視野に入っていなかったことである。また、将来専門的な人材を育成するために制定したこの「本校五年間の計画書」の計画の実施は4つの段階に分かれる。そこには学制・授業科目の整備、図書室・実験室・製造機械室などの設置、宿舍・食堂校舎の修築などさまざまな計画<sup>35)</sup>が含まれ、人材の育成により良い環境を提供しようとするものであった。

では、江蘇省立水産学校において、水産人材はいかに育成されていたのであろうか。次節で検討することにしてしよう。

## 二 水産人材の育成状況

### (一) 学生の募集および科目の設定

江蘇省立水産学校は1912年12月に創設され、12月1日から10日まで10日間連続で『申報』に学生募集の広告を掲載していた。募集要項は以下のとおりであった。

本校は予科生70名を募集し、1913年正月に新学期を開始する。夏休み終了後に本科に進学し、在学期間は3年で卒業とする。

資格：15歳以上の高等小学校の卒業生および同等の学力を有する者を合格とする。

試験科目は国文、英語、数学、理科である。授業料と宿舍の費用は免除する。食費は毎月4元とする<sup>36)</sup>。

この募集要項は江蘇省立水産学校が最初に『申報』に掲載したものである。該校は1912年末から予科の学生を募集したことがわかる。実際に1912年12月には68名の予科生を受け入れた<sup>37)</sup>。その他、募集学生数、入学資格、在学期間、試験科目などが定められている。授業料と宿舍の費用は免除されていた。当時、該校が募集した学生は小学校の卒業生で、水準は決して高くなかった。この頃の日本の水産講習所への入学志願者の資格が中学校卒業レベルと比較すると大きな差異がある<sup>38)</sup>。また、もう1つの異なる点は中国では宿舍の費用すら免除されていたことである。これは水産人材育成の緊急性を示すものと推測される。当時、学校の校舎はまだ建設中で

あったので、江蘇省教育会のビルの3階に間借りし、教室として使用していた<sup>39)</sup>。1914年1月の『申報』の募集要項によると、学校は「吳淞砲台湾」に移転している<sup>40)</sup>。

校長張鏐、製造科主任曹文淵、漁撈科主任李士襄、実習科主任胡溶泰<sup>41)</sup>の4人は農商務省水産講習所の卒業生であり、学科の設置も日本を模倣していた。予科科目と本科科目は以下のとおりである(表2、表3、表4)。

これら3つの表に見えるように、江蘇省立水産学校の学制としては、予科は半年、漁撈と製造の本科は3年であった。直隸水産講習所と同様に、1年目は教養科目および水産入門科目を学び、2年目からより専門的な漁撈・製造・気象知識を学ぶ<sup>42)</sup>。また、同じ1915年の農商務省水産講習所の漁撈科の課程と比べると、農商務省水産講習所では、1年次に漁撈論(漁具・漁法)、航海術、海洋及気象学<sup>43)</sup>などの科目が教授されるのに対し、江蘇省立水産学校では2年次からであった。

さらに、実習について見ると、江蘇省立水産学校は3年次に主に実習を行ない、毎週の授業時間の3分の2を占めた。直隸水産講習所のカリキュラムの中では、漁撈・製造科の実習時間は「不定」とされているが<sup>44)</sup>、江蘇省立水産学校の場合は実習の時間数およびその占める割合を明確に記載している。一方、農商務省水産講習所の漁業科では、1年次にすでに「実験及実習(操艇、製図、気象など)」<sup>45)</sup>を行なっている。製造科でも同様のことが確認できるから、江蘇省立水産学校の授業や実習内容は、同年度の日本と比べると、相対的に簡単なものであったといえるだろう。

実習船は江蘇省政府が準備できなかったため、江浙漁業会社の漁船・福海号を借りて実習を行なった<sup>46)</sup>。漁港の山東省煙台や浙江省寧波に臨海実習場を設けたうえで、漁船の運用、航海の練習、漁具の製造、気象の観測、漁業の基本調査など幅広い内容を学んだ<sup>47)</sup>。

このように江蘇省立水産学校には当時、漁撈科および製造科しかなかったのに対し、日本の水産講習所には養殖科も設けられていた<sup>48)</sup>。江蘇省立水産学校になぜ養殖科が設置されなかったのか。次にこの問題を考えてみたい。

表2 江蘇省立水産学校予科の科目および週ごとの時間数

| 予科科目 | 第一学期(時間数) |    | 第二学期(時間数) |    | 第三学期(時間数)     |    |
|------|-----------|----|-----------|----|---------------|----|
| 修身   | 実践道徳之要旨   | 1  | 同上        | 1  | 同上            | 1  |
| 国文   | 記事文       | 6  | 記事文       | 6  | 記事文           | 5  |
| 外国語  | 日本語       | 7  | 日本語       | 7  | 日本語           | 5  |
| 地理   | 世界地理      | 2  | 本国地理      | 2  | 人生地理          | 2  |
| 数学   | 算術・代数 幾何  | 8  | 算術 代数 幾何  | 8  | 代数 幾何         | 8  |
| 理科   | 無機化学 動物学  | 7  | 無機化学 植物学  | 7  | 無機化学 物理大意 鉱物学 | 10 |
| 図書   | 自在書       | 2  | 自在書       | 2  | 用器書           | 2  |
| 体操   | 柔軟操       | 3  | 柔軟操       | 3  | 器械操           | 3  |
| 合計   |           | 36 |           | 36 |               | 36 |

表3 江蘇省立水産学校本科・漁撈科の科目および週ごとの時間数

| 漁撈科科目        | 第一学年 (時間数)   | 第二学年 (時間数) | 第三学年 (時間数) |
|--------------|--------------|------------|------------|
| 倫理学          | 1            |            |            |
| 国文           | 書翰文 4        | 議論文 3      |            |
| 外国文 (日本語、英語) | 7            | 4          | 4          |
| 地理           | 地文・天文地理 2    |            |            |
| 数学           | 幾何・三角・解析幾何 6 | 弧三角・測量 4   |            |
| 物理           | 力学・熱学 5      |            |            |
| 化学           | 有機化学 2       |            |            |
| 図書           | 用器書 1        | 用器書 1      |            |
| 簿記           |              |            | 2          |
| 体操           | 2            |            |            |
| 水産通論         | 2            |            |            |
| 水産動物・植物学     | 3            |            |            |
| 製造論          | 1            |            |            |
| 漁撈法          |              | 4          | 5          |
| 航海技術及漁船使用法   |              | 5          |            |
| 漁具製造大意       |              | 2          |            |
| 応用機械学        |              | 2          |            |
| 海洋気象学        |              | 2          | 1          |
| 衛生法          |              |            | 1          |
| 漁業法規         |              |            | 1          |
| 漁業経済         |              |            | 1          |
| 合計           | 36           | 27         | 15         |
| 実習           |              | 週8時間以上     | 毎週授業の2/3   |

表4 江蘇省立水産学校本科・製造科の科目および週ごとの時間数

| 製造科科目        | 第一学年 (時間数)   | 第二学年 (時間数) | 第三学年 (時間数) |
|--------------|--------------|------------|------------|
| 倫理学          | 1            |            |            |
| 国文           | 書翰文 4        | 議論文 3      |            |
| 外国文 (日本語、英語) | 7            | 4          | 4          |
| 地理           | 商業地理 2       |            |            |
| 数学           | 幾何・三角・解析幾何 4 |            |            |
| 物理           | 力学 熱学 4      |            |            |
| 化学           | 有機化学 5       | 4          |            |
| 図書           | 用器書 1        | 用器書 1      |            |
| 簿記           |              |            | 2          |
| 体操           | 兵士操 2        |            |            |
| 水産通論         | 2            |            |            |
| 水産動物・植物学     | 3            |            |            |
| 製造法          |              | 8          | 4          |
| 漁撈法          | 1            |            |            |
| 製造化学         |              | 2          |            |
| 細菌学          |              | 2          |            |
| 応用機械学        |              | 2          | 2          |
| 気象学          |              | 1          | 1          |
| 漁業法規         |              |            | 1          |
| 漁業経済         |              |            | 1          |
| 合計           | 36           | 27         | 15         |
| 実習           |              | 週8時間以上     | 毎週授業の2/3   |

『江蘇省立水産学校之刊第一刊』(1915年)により作成。



## (二) 第二世代留日学生の帰着と養殖科の設置

江蘇省立水産学校の中になぜ養殖科が設置されなかったのか、その理由を究明する前に、まず民国初期の養殖業の状況から見てみよう。

魚類の産額を増加せんと欲すれば養殖を實行すべし、夫れ支那の養殖事業は数千年前に發明せられたれども、特に養法陳腐し、設備簡陋なるを以て未だ銳意精研する能はず、改造するも食料供給過度の如きは全く起こらざるべし。池の建設は合法ならざれば魚類の生存上障碍あり、他の疾病害蟲の不除、水温水質の不注意の如きは皆良好なる結果を得る能はざる重大原因たり。今や養殖の学大いに進み、世界各国は皆養魚法の改良に意を用ひざるは無く、其内最も発達せりと称せらるものは第一に獨逸を推すべく、其獲利を論ずれば多き時は四五倍以上なりと。面して凡そ魚の受精、卵の孵化、種々なる改良は皆人工を以て行ひ、其巧妙なる事自然以上なりといふ。其他生物種子の保護の如き亦極めて意を用ふべきなり。網目の制限、産卵区域の禁航、水中に汚物の放棄及水質に有害なる薬品の排洩の如き皆種子の繁殖と緊要なる関係あり<sup>49)</sup>。

一口に養殖といっても、養魚池の建設、病害の予防、水温、水質など魚類の生存に影響を与える要因、および魚の受精、卵の孵化、繁殖など、さまざまな点において人為的な介入が必要であった。中国の養殖業の歴史は長いが、民国期になると、養殖の方法は遅れ、設備は粗末なものとなってしまっていた。

創設初期の江蘇省立水産学校に養殖科が設置されなかった理由について、張鏐は1912年10月、「呈都督臚陳本校辦法文」の中で以下のように述べている。

養殖の稚魚となる魚を選ぶのは困難である。慎重にしないと繁殖は難しく、品種を選ぶのもっと複雑になる。したがって、養殖に対する研究は十分な心得がある人がいないと、その任に堪えない。まだ日本の水産学校の養殖科から卒業した学生はいない。もし国内に人材がいれば〔漁撈科や養殖科と〕同時に行なうこともできるだろうが、そうでないならば、むしろ養殖科を欠いたまま将来を待ったほうがよい<sup>50)</sup>。

養殖の品種を選ぶのは簡単ではなかった。日本で養殖を学習した経験がある人材がなかったため、養殖科は設置できなかった。実際のところ、張鏐のような第一世代の水産人材が養殖科の重要性を意識しなかった、あるいは見逃していたとは考えられない。国内で養殖科を設立し、養殖の人材を育成するために、1918年、第二世代の水産人材の代表者となる陳椿寿・陳謀琅の2人が江蘇省立水産学校の最初の卒業生として農商務省水産講習所へ派遣されて養殖業を学んだ。

ここで筆者が用いる「第一世代水産人材」と「第二世代水産人材」の語について説明しておきたい。「第一世代」とは中国に水産学校がなかった時代、農商務省水産講習所に留学した中国人

の留学生をさしている。一方「第二世代」とは第一世代の水産人材が帰国後に育成した水産人材であり、彼らの大多数も第一世代と同様、日本の水産教育機関で学習した経験を有している。そしてさらに「第三世代」は「第二世代」の帰国後に育成された人材である。

話をもとにもどすと、3年後の1921年、陳椿寿・陳謀琅は中国にもどってきた。『申報』の中には、養殖科の設置に関して、次のような記事が見られる。

江蘇省立水産学校が創設された時、もともと漁撈・製造・養殖の3科を設置する予定であった。しかしその後、養殖科の人材が不足し、開設は延期されていた。1917年の該校の第一期の卒業生から陳椿寿・陳謀琅を選び、日本の水産講習所へ赴いて養殖を専門的に学ばせた。今に至るまで3年を経て、すでに卒業し、中国にもどった。該校は規則を定め、省に呈上し、今年の秋、学生を募集する時に養殖科を加えようと提案した。該校の漁撈科・製造科は成績が優れ、現在では養殖科を設置しており、将来漁業には大きな希望があり、水産業の前途は洋々である<sup>51)</sup>。

陳椿寿・陳謀琅の両名は帰国後、第二世代水産人材の代表者として、水産養殖の状況を調査し<sup>52)</sup>、水産界、水産教育界で出世した。各年度の『水産講習所一覽』を調べると、江蘇省立水産学校の卒業生の中で日本の官立水産講習所の課程を学習し終えたのは陳謀琅、陳椿寿の2名のみであった(附表を参照)。1921年7・8月から初めて養殖科の学生が募集され、予科は1年間、本科は3年とされた<sup>53)</sup>。2年次から漁撈・製造・養殖の3つより1つを選んで専修する。さらに、1910年の中国最初の直隸水産講習所の設立から、江蘇省立水産学校で初めて養殖科を設置するまで、11年の時を経た。校長張鏐は中国と日本の間を駆けまわって、ついに漁撈・製造・養殖の3つの課程を設置した。こうして江蘇省立水産人材の教育はようやく比較的高いレベルに到達したのである。

### (三) 卒業生の数と進路

次に、江蘇省立水産学校で育成された水産人材について分析するために、『江蘇省立水産学校記念冊』(以下、『記念冊』と略す)の中の1921年までの漁撈科と製造科の卒業生の数を整理す

表5 江蘇省立水産学校各学年の卒業生の数

|     | 第1回<br>1917年<br>1月 | 第2回<br>1917年<br>12月 | 第3回<br>1918年 | 第4回<br>1919年 | 第5回<br>1920年 | 第6回<br>1921年 | 総計 |
|-----|--------------------|---------------------|--------------|--------------|--------------|--------------|----|
| 漁撈科 | 11                 | 6                   | 0            | 4            | 3            | 10           | 34 |
| 製造科 | 14                 | 12                  | 10           | 11           | 3            | 6            | 56 |
| 総計  | 25                 | 18                  | 10           | 15           | 6            | 16           | 90 |

『江蘇省立水産学校記念冊』『校友録』(1922年、1~15頁)により作成。

ると表5のようになる。

全体的に見れば、江蘇省立水産学校の卒業生は多くない。製造科の卒業生が比較的多く、漁撈科の2倍近くにのぼる。『記念冊』の「江蘇省立水産学校十年大事表」によると、該校は1912年から1921年までに計10回、合計548名の予科生を募集した<sup>54)</sup>。本科の学制は3年で、予科の学制は半年であるため、1921年に卒業した学生は1917年の入学者にあたる。1917年7月までに6回で合計279名の予科生<sup>55)</sup>を募集したが、その中でわずか90名しか卒業しなかった。つまり、学業を成し遂げた学生は3分の1に止まったのである。これに対し、直隸水産講習所では1922年までに同じように合計6班の学生が卒業し、漁撈科87名と製造科71名の合計158名の水産学生が卒業している<sup>56)</sup>。卒業生の数だけ見ると、江蘇省立水産学校の卒業生の数は少なかったといわざるをえない。

また、この90名の卒業生の進路を『記念冊』の「江蘇省立水産学校卒業状況表」で確認すると、教育関係者は37名、実業関係者は11名、行政関係者4名となり<sup>57)</sup>、教育界で活躍した卒業生が非常に多いことがわかる。母校で水産教育に従事した者の数も多い。卒業生の氏名や担当した科目を整理すると、以下のようになる(表6)。

表6 江蘇省立水産学校の本校出身の教員(1922年)

|                | 現任教員            | 退任教員             |
|----------------|-----------------|------------------|
| 氏名             | 蘇以義 化製教員        | 王剛 教務員           |
|                | 貝鉦工場管理員         | 張景葆 海豊船長         |
|                | 鄭翼燕 製造科技術員      | 伍瑞林 製造科技術員       |
|                | 校外実習場管理員        | 張礼銓 工場庶務         |
|                | 沙玉嘉 漁撈科主任       | 楊勤仁 書記           |
|                | 漁撈教員            | 毛殿栄 製造科技術員       |
|                | 陳廷煦 製造科主任       | 張柱尊 漁撈科主任 海豊船長   |
|                | 製造教員            | 張毓騷 製造科技術主任      |
|                | 金志銓 漁具教員        | 王傳義 漁撈科技術員       |
|                | 侯朝海 海洋機械教員      | 徐致助 製造科技術員       |
|                | 楊樹恒 航船船長        | 顧維垣 漁撈科技術員 気象助理員 |
|                | 唐秉堃 製造科技術員 化学助理 | 王礼儀 庶務員          |
|                | 樊汝霖 製造科技術員      | 顧垂倬 製造科技術員       |
|                | 製缶工場管理員         | 沈士芳 漁撈科技術員       |
|                | 陳椿寿 細菌教員 養殖場管理員 | 陳挺之 製造科技術員       |
|                | 陳謀琅 養殖科主任       | 楊正青 製造科技術員       |
| 姜長慶 運用実習 体育指導員 | 張声洋 製造科技術員      |                  |
| 張文耀 運用実習 体育指導員 | 余鯤 漁撈科技術員       |                  |
| 呉金祥 漁撈科技術員     | 張祉澄 漁撈科技術員      |                  |
| 沙惠嘉 漁撈科技術員     | 施恩濟 対船船務員       |                  |
| 秦宝鑫 漁撈科技術員     |                 |                  |
| 合計             | 16              | 20               |

『江蘇省立水産学校記念冊』「校友録 一、現任教員 二、退任教職員 三、卒業生」(1922年、1~21頁)により作成。

「退任教職員」の名簿には合計102名<sup>58)</sup>の氏名を確認できるが、その中で母校卒業生は20名に達する。また「現任教職員」の名簿には計39名<sup>59)</sup>の氏名が見えるが、母校出身の現任教職員は16名を数え、教員数の半分近くを占めている。

さらに、さきに述べたように、「江蘇省立水産学校卒業生状況表」の中には37名の教育関係者があり、また卒業生のうち母校で教員を担当したのは36名であったから、1名は江蘇省立水産学校以外の学校で教員を担当したはずであるが、筆者が推測するかぎり、それは漁撈科の第2回卒業生であり、後に集美学校水産科主任を務めた馮立民である可能性が高い。集美学校水産科と馮立民については次節で紹介する。

表5からわかるように、1912年から1922年まで、漁撈科と製造科を合わせて合計6回の卒業生があり、合計90名の学生が卒業した。90名の卒業生のうち、合計37名は1922年時点で現職であるか、かつて教員であったことになる。つまり、卒業生のうち教員を務めた比率は40%以上に達する。これを直隸水産講習所と比べると、1922年までの計6班の卒業生の中で、水産学校および水産試験場において教員となったのはわずかに10名であった<sup>60)</sup>。

このように江蘇省立水産学校は母校を中心に、ある程度、国内の水産人材の不足の状況を緩めるのに貢献した。しかし、すでに前節で述べたように、学校が創設された当初の目的は、校長張鏐が述べたごとく製造業を中心とする水産人材の育成であったにもかかわらず、実業関係者となった者は11人<sup>61)</sup>しかいなかった。それに対し、卒業生の40%以上は教員になっており、創設初期の目標とは大きく異なる結果となっていた。張鏐は『記念冊』「序二」の中で以下のように語っている。

〔水産学校の〕計画・準備の際に、私〔張鏐〕は学校の成果は校内によらず、校外にかかっていると考えていた。仮にも10年後に卒業生の事業を表にして、誰かが漁業会社を創立し、誰かが製造工場を建設したというのであるならば、それはわずかの数字であっても、我が校の成果を大いに示すものである。今は〔水産学校の創設時から〕すでに10年になるが、卒業生の中で実業界に力を尽くしたのはたった10分の2である。一方、教育界に身を投じた学生数はむしろそれを超えている。その原因を推し量ると、事業の創立には専門的な人材の蓄積が求められるが、我が学校の学生のレベルや年齢はそれとは十分に釣り合いが取れていない。授業科目はたまた中級の範囲を超えるが、所詮完全に専門的な学術を教えることはできない。世の中に水産業はもともと存在しておらず、また水産業を呼びかけることができる卒業生も少ない。学校と社会がお互いに適応していないのである<sup>62)</sup>。

1922年にいたるまで、水産学校は10年もの間、模索しながら、経営に苦心してきたが、また同時に水産教育上の問題をも露呈させていた。すでに分析したように、江蘇省立水産学校において、2年次の学生が学んだ水産科目は、農商務省水産講習所の学生が1年次に学んだものである。張鏐が述べたような、卒業生が教育界で活躍することはあるものの、実業界に身を投じる者が少

ないという問題点も、こうした教育レベルと関係があるのではないかと推測できる。また、当時の水産業は立ち遅れていたため、水産学校において学生が身につけた知識が、必ずしもただちに社会において役立つわけではなかった。以上のように、校長張鏐は水産人材育成の実態と水産業の立ち遅れに遺憾の意を表していた。それでは、その後水産学校の学生は水産教育上の問題にいかなる反応を示したのであろうか。

### 三 「水産風潮（水産騒動）」と水産学校の新発展

#### （一）水産風潮

1924年、創立後すでに10年間以上を経た水産学校は初めてといえる危機に遭遇した。『申報』の記事では、この危機を「水産風潮（水産騒動）」という語で表現している。この「水産風潮」について先行研究では触れられていないが、いったいどのような事件であったのであろうか。1924年6月19日、『申報』は江蘇省立水産学校の学生らが授業をボイコットした騒動に関する記事を掲載している。

昨日呉淞水産学校のすべての学生らは突如正門を封じて出入りを許さなかった。学校の入口に白布を掛け、「校長張鏐や教務長沙玉嘉を辞任させよ。目的が達成できなければ絶対に始業させない。自由を与えよ、然らずんば死を与えよ」というような字句が書かれていた。また、ビラを撒き散らし、学校の電話線を切断し、すべての教員を閉じ込めた。夜になっても、電灯をつけなかった。ボイコットの原因は、学校がこの間、無錫の学生である侯匯瀛を除名したことに對し、学生らがそれを撤回するよう要求して根回しを行なったものの、昨日交渉が決裂したことにある。現在、校長は上海の省教育会に赴いて事情を報告している<sup>63)</sup>。

以上が「水産風潮」に関する最初の記事である。水産学校の学生らは授業をボイコットしただけでなく、学校の教員の監禁すら行っていた。さらに校長や教務長まで辞任させようとし、事態は相当に深刻な状態にまでいたった。6月24日の続報によれば、学生らの常軌を逸した行為を処理するために、学校側が警察に依頼し、話し合いを行なうように勧告したが、効果はなかった。結局、学校は休校となった<sup>64)</sup>。

しかし、学生らは依然として離校しなかった。25日に宝山区や呉淞郷の警察局からそれぞれ十数名の警察が出勤し、学生らに離校を強く要求したが失敗、事態はさらに深刻となった<sup>65)</sup>。県レベルの警察局では事態を打開できないため、校長は南京省長および教育庁に指示を仰いだ<sup>66)</sup>。28日になると省長が騒動に介入した。

28日午後、宝山区知事や呉淞警察局長は省長の命令にしたがって、水産学校に警察を派遣し、30名の学生を強制的に学校から追放した。県警察は逮捕状を出し、於以振・侯匯瀛の兩名に率いられた学生らを召喚・尋問した<sup>67)</sup>。29日に校長張鏐は省長、教育庁長宛ての電報の中で、今回

の騒動の原因いかにかわらず、責任は決して免れないとして辞意を表明した<sup>68)</sup>。「水産風潮」は最終的に、宝山県知事が侯匯瀛など11名の学生を除名、8名の学生を観察処分につくことで終わりを見た。また、省長は学校の改組に関連して、別に調査を実施し処理するように求めた<sup>69)</sup>。

「水産風潮」を振り返ってみると、たった1名の学生を除名によって引き起こされた騒動がどうして校長の辞任にまで発展したのかが焦点となる。学生らがボイコットの際にばらまいたチラシの中には、次のような記載があった。

我が学校の校長である張鏐は、〔学校を〕創立してから10年あまりを経ても、全く業績もなく、学校の事務は進まず弛んでしまっている。彼の罪状は数えきれず、筆舌に尽くしがたい<sup>70)</sup>。

授業をボイコットした学生らが誇張していた可能性もあるが、ある程度、当時の学生らの心情を反映したものといえるだろう。学校を卒業しても、学んだ水産知識が社会で実際に役立つことが「水産風潮」を起こす原因になったと推測できる。また、江蘇省教育庁の視学官であった陸規亮の「水産風潮」に関する調査では、以下のような報告がなされている。

〔省教育庁の〕命令を受け、「水産風潮」を調査し、詳しく取材して事実を追求した。「水産風潮」の最大の原因は、数年来、卒業生は〔水産知識の〕応用がきかず、進路が非常に狭く、在校生は皆希望が満たされないという不満を抱えていることであると判明した<sup>71)</sup>。

ここにはっきりと記されているように、学生の進路への不満が「水産風潮」を誘発したことは間違いない。校長張鏐は辞職し、1924年7月27日には江蘇省省長である韓国鈞が当時の集美学学校水産科主任であった馮立民を水産学校校長に任命したが、夏季休暇中の学生らはこれを聞いて、2つの理由によって馮立民の着任に反対した。1つは馮立民が本学の卒業生であり、日本の農商務省水産講習所でわずか1年間しか見習いをしていないことである。もう1つは彼が張鏐と親戚関係にあり、校長を務める資格に合致しないということであった<sup>72)</sup>。こうした学生らの反対意見に対して、江蘇省教育庁は次のように反駁した。

水産学校の善後処理の方法に関しては改組の必要があると考えている。……調べたところ、馮校長はかつて集美学学校において水産教育を展開し、その業績は甚だ大きい。本庁長からの再三の願いを入れて、ようやく一時的に校長を務めるのを引き受けたのである。しかし、学生らはそうした苦衷を察することなく、好き放題にものを言い、騒ぎを起こしている。ほかに思惑がなければ、これほどまでに逸脱することもあるまい。該校でこのたび発生した「〔水産〕風潮」が、当該学生の学業や、学校の名誉と前途について払った犠牲が甚大なものであることを知るべきである。今のうちに悔い改めるのであれば、後々に救いようがあるだ

ろう<sup>73)</sup>。

まず馮立民と集美学校水産科について紹介しておこう。集美学校水産科が創設される以前、江蘇省立水産学校漁撈科の第2回卒業生であった馮立民と侯朝海は、集美学校校長の陳嘉庚の経済的援助の下で、農商務省水産講習所に留学した<sup>74)</sup>。1920年には馮立民は初代主任として集美学校水産科を創立した<sup>75)</sup>。侯朝海も帰国後、1922年のはじめに、集美学校水産科で教員を務めた<sup>76)</sup>。1924年には水産科の第1組の卒業生、つまり第三世代水産人材の鄧騰裕・張栄昌も第二世代水産人材のように農商務省水産講習所に留学した<sup>77)</sup>。同年、馮立民が江蘇省立水産学校校長を務めた際、侯朝海は集美学校水産科の代理主任となった<sup>78)</sup>。つまり集美学校水産科は馮立民と侯朝海の協力のもとで、次世代の水産人材を育成しつつあった。

馮立民が「水産風潮」を経て、改組期の江蘇省立水産学校において校長を務めた時期は長くない。1924年8月から半年も経たない1925年の1月に、再び集美学校水産科にもどった<sup>79)</sup>。1925年2月には初代校長の張鏐が逝去した<sup>80)</sup>。水産学校にとっては、不運が立て続けに起こったわけであるが、「水産風潮」を経て江蘇省立水産学校はその後どのように変化・発展していったのだろうか。

## (二) 水産学校の新しい発展

その後、江蘇省立水産学校の振興に努めたのは、馮立民とともに陳嘉庚の援助を受け、日本に留学した侯朝海であった。彼は1917年に江蘇省立水産学校を卒業し、1918年～1920年に日本農商務省水産講習所において実習および研究を行なった<sup>81)</sup>。1921年に日本中央気象台海洋気象部研究員<sup>82)</sup>を務め、同時代の水産人材の中で唯一の中央気象台で学習したことがある人物であった。前節でも言及したように、彼は第二世代水産人材として1922年に帰国後、ずっと集美学校水産科に在職していた。1925年5月に、母校の江蘇省立水産学校にもどって校長を務めた<sup>83)</sup>。彼は3つの方面から江蘇省立水産学校の水産教育体制を革新・強化した。

第1に、新しい科目の設置である。江蘇省立水産学校は、水産学校の中で唯一の遠洋漁業科を設置した学校である。『申報』掲載の募集要項には以下のような記述がある。

我が国は海岸線が長く、水産物は豊富である。近年沿海各省において水産学校および水産試験場を創設し、〔漁業に関する〕技術・学問を研究しているものがあるが、遠洋漁業に関しては、施設が十分ではなく、訓練を行うことができないため、漁業の権益は他人の手に落ち、海洋の利益を収めがたい。近頃、各業界の名士たちが資金を集めて遠洋漁業事業を創設しようと試みているが、人材は欠乏し〔遠洋漁業を創設するのは〕困難である。弊校はこれに鑑みて、今年の秋に遠洋漁業専修科を設置し、もっぱら上記の必要な人材を育成する<sup>84)</sup>。

江蘇省立水産学校が遠洋漁業科を設置したのは、当時日本漁船の中国での漁業活動と関係があ

る。日本では「遠洋漁業奨励法」実施以降、汽船トロール漁業に代表される大規模遠洋漁業の発達が促された。1910年に政府が汽船トロール漁業に対する遠洋漁業奨励金の下付を中止すると、トロール漁業者は遠洋漁業へと乗り出した<sup>85)</sup>。遠洋漁業科卒業生の多くがトロール漁業の乗組員になったことは、汽船トロール漁業の勃興を押し進めることになった<sup>86)</sup>。20年代からは、上海を根拠地として操業し、漁獲物の一部分も上海で荷揚げ・販売しようと試みた<sup>87)</sup>。こうした日本側の動きが国民政府や各業界の注意を引き起こしたのであった<sup>88)</sup>。

第2に、教員の招聘である。1928年の時点で、張元第が教務主任・工場主任・専科教員、呉毅が遠洋漁業科・専科教員、陳同白が製造科主任・専科教員、陳椿寿が養殖場主任・専科教員を務めた<sup>89)</sup>。当時の水産教育界の俊英が集まっていたといえるだろう。張元第は直隸水産講習所漁撈科の卒業生で、卒業後、日本の長崎水産試験場および農商務省水産講習所製造科目で実習や学習した経歴がある<sup>90)</sup>。当時、留日水産人材の中でこのような経歴の持ち主は極めて珍しい。彼は1930年に、直隸水産講習所を改組した河北省立水産専科学校の校長を務めた<sup>91)</sup>。呉毅は附表にあるように、1922年に農商務省水産講習所を卒業した。このように民国期の主流は留日人材であったが、陳同白は水産教育界において唯一の留美人材であった。彼の留学期間中に、侯朝海はワシントン大学水産学院院長に手紙を書き、帰国後に教員を務められるような学生の推薦を要請していた。陳同白は1926年2月から1927年2月まで江蘇省立水産学校製造科の教員・主任を務めた<sup>92)</sup>。1928年には再び江蘇省立水産学校にもどり、製造科主任となった<sup>93)</sup>。1929年8月には広東省政府建設庁により広東水産試験場場長に任命された<sup>94)</sup>。侯朝海が当時の水産界の俊英を集めたことは彼の最大の功績といえるであろう。

第3に、各水産学校や水産行政機関を連合し、水産教育を展開した点である。これも侯朝海の水産学校の教育体制、ひいては中国の教育体制の革新を体現したものであるといえる。1926年8月22・23の両日に開催された「水産学校連合会」は中国近代史において水産教育・水産人材の育成に関する最初の全国的規模の会議であるといつてもよいかもしれない。かかる画期的な会議について8月24日付けの『申報』は以下のように報じている。

22日午後2時、中華民国水産学校連合会は呉淞水産学校（江蘇省立水産学校）で成立大会を開催した。会議の出席者は農商部代表王文泰、江浙漁業事務局代表李士襄、江蘇実業庁代表周監殷、江蘇省立水産学校代表侯朝海・陳同白・陳椿寿、浙江水産学校代表陳謀琅、福建集美学校水産部代表馮立民・呉子熙であった。その他の直隸・山東・奉天の各水産学校の代表は会議に出席できなかった。まず侯朝海を臨時主席に選出し、水産連合会の計画・準備の状況を報告した。それから農商部代表王文泰がスピーチした。その概要は以下のとおりである。「我が国の水産学校についていえば、直隸水産講習所が最初に創設され、その後に江蘇省立水産学校が創設された。浙江・福建・奉天の各水産学校も相次いで創設された。戦乱のため、山東省の水産学校はいまだ発展していないが、他の学校〔の運営〕は積極的に進められており、全力を傾注して、素晴らしい成績を上げている。水産業は大きな将来性を有して



おり、大変祝賀すべきことだと考えている。ただし、我が国では水産業は未熟な状態にある。日本や欧米と比べれば大きな差が存在する。そこで今回、貴会の同志諸君が奮闘して努力するのを希望する」<sup>95)</sup>。

かかる記載から見ると、中華民国水産学校連合会を画期的な会議であるとする最大の理由は、農商部といった中央官庁のほか、江浙漁業事務局、江蘇実業庁および沿海各省の水産学校の代表など、全国沿海各省の水産関係者が一同に会した最初の本格的なものであったからに他ならない。会議の具体的な議題としては、水産雑誌の定期的な出版、実習や授業の学校間の交換、漁場・漁況の調査、臨海生物実験所の設立、日本の関係機関の参観・視察、漁業に関する政策の頒布など<sup>96)</sup>をめぐるので、積極的な討論が交わされたらしい。

また、会議の出席者である王文泰、李士襄、周監殷、侯朝海、陳同白、陳椿寿、陳謀琅、馮立民らはいずれも中国水産事業の開拓者で、早期の水産界において唯一無二の柱石として位置づけられる人びとであった。その中に、前節で言及した、農商務省水産講習所に養殖を学んだ江蘇省立水産学校の卒業生である陳謀琅は、浙江省立高級水産学校の校長になっていた<sup>97)</sup>。1915年に成立した浙江省立甲種水産学校は、1923年に浙江省立高級水産学校と改名した<sup>98)</sup>。1925年から校長を務める陳謀琅は校舎の移転、新しいキャンパスの建設、教員の招聘、学生の募集、学科の建設と学制の改革などさまざまな方面で努力した<sup>99)</sup>。陳謀琅校長以外にも、張柱尊、張毓駿、金心衡、姚煥洲、凌鵬程などの校長や教員らも江蘇省立水産学校の卒業生であった<sup>100)</sup>。前述のとおり、福建集美学校水科の創設初期、馮立民や侯朝海の協力のもとで、次世代の水産人材が育成されつつあった。河北省立水産専科学学校の教員の中にも江蘇省立水産学校の卒業生がいた<sup>101)</sup>。つまり江蘇省立水産学校は沿海各省の水産学校の中で中核的な役割を発揮し、沿海各地の水産学校に水産人材を送り出していたことがうかがえるのである。

さらに「水産学校連合会」の王文泰のスピーチによれば、沿海7省のうち、広東省を除く6省において水産学校が相次いで設立されていた。各省の水産学校の事業は比較的順調に展開されつつあり、良い成績をあげて、前途有望であると見なされていた。中国の水産教育全体の現状について、王文泰は楽観的に評価している。では、1930年代中国水産教育の全貌はいかなる状況にあったのであろうか。費鴻年<sup>102)</sup>は中国水産教育機関に関して以下のように述べている。

中国各水産学校および試験場の設備は意外と粗末である。歴史がある水産学校には試験用の漁船さえなく、ましてや科学器械など言うまでもない。しかし、これは学校および試験場当局の過ちではなく、経費の不十分、および創設した時に十分な準備がなかったことに起因するものである<sup>103)</sup>。

ここからわかる30年代前後の水産教育機関の現状は、実際のところ、粗末な設備、経費の不足などを原因として、決して順調とは言えなかったではなかった。1931年まで中国の水産教育

は20年間ほど行なわれたが、人材育成のシステムはいまだ完備されていなかった。沿海各省の水産学校に数多くの水産人材を送り込んだ江蘇省立水産学校も1929年には漁撈科と製造科のみを残し、養殖科も遠洋漁業科も学生の募集を停止するようになった<sup>104)</sup>。

また、侯朝海は「中央及各省応有之水産教育施設」の中で漁民教育の視点から以下のような私見を述べている。

沿海各省は長年にわたって水産教育を行ない、卒業生の多くは沿海各県の出身であるが、漁民の子弟は非常に少ない。その教育の結果はただ沿海各地の中流社会以上の子弟に水産業の知識を教えたに過ぎない。漁撈技術を練習し、新式漁法に取り組むことができる者はごく少数であり、大多数の者は習慣、体格、観念などの理由で漁業に従事することができない。したがって、将来水産事業の発展を促すためにも、漁民の教育もまた同時に重視しなければならない<sup>105)</sup>。

「江蘇省立水産学校学生家族職業比較図」<sup>106)</sup>を確認すると、学生らの父親の職業のうち、商業や教育に従事するのが半分を占める。推測が許されるのであれば、漁民の子弟は水産学校で教育を受けるのは非常に難しかったと思われる。侯朝海の世代となって、ようやく漁民および漁民の子弟向けの漁業教育に注目が集まりはじめたのである。

また、当時の各水産学校は水産上の各種の問題を解決できる指導者レベルの人材を育成する能力を持っていなかった<sup>107)</sup>。水産学校連合会に出席した水産人材を見るとわかるように、大多数は留学経験がある人材であり、海外の水産教育機関の留学生に頼っていた。紙幅の制限は尽きた。江蘇省立水産学校に止まらない、民国初期における水産教育機関をめぐる諸問題については別稿で論じることしよう。

## おわりに

本稿では、江蘇省立水産学校を取り上げ、日本の農商務省水産講習所を卒業した第一世代・第二世代の水産人材が母国・中国において行なった水産学校の創設および水産人材の育成について検討した。とりわけ、張鏐を中心とした第一世代水産人材の水産教育が心血を注いだ、学校のカリキュラム、科目の設置、卒業生の進路などの方面の分析を通じて、水産学校創立後10年間に行なった水産教育の状況がある程度わかってきた。20年代に入ると、「水産風潮」、校長張鏐の逝去を経て、馮立民や侯朝海らの第二世代水産人材が水産教育上の挫折を乗り越えるために、遠洋漁業科の設置、教員の募集、沿海各地の水産学校との連合などの一連の改革を行なった。管見のかぎり、水産教育界の大連合は初めてではないかと思われる。また、江蘇省立水産学校が育成した水産人材は沿海各省の水産教育機関に赴き、沿海各地で次世代の水産人材を育成しつつあった。すなわち、江蘇省立水産学校はセンター的な役割を果たしたといえる。

しかし、江蘇省立水産学校の発展は順風満帆とはいえなかった。本論中で言及したように、1929年になると漁撈科と製造科しか残らなかった。江蘇省立水産学校に止まらず、中国全全般の水産教育の発展もうまく進めることができなかった。費鴻年が指摘したように、民国期の水産教育はいまだ多くの問題を有していた。また、侯朝海は水産教育に必要なのは3種類の水産人材の育成——第1に水産界の研究者および水産学校の教員の育成、第2に水産界のリーダー層および彼らの協力者の育成、第3に一般の漁業従事者に対して指導する人材、時代に基づいた緊急的なあるいは予備的な人材の育成——であると述べていた<sup>108)</sup>。

沿海各省の各水産学校の中で、江蘇省立水産学校は沿海の水産教育機関に数多くの水産人材を送り出した。しかし、その他の水産教育機関は人材育成において成功したとはいいがたい。例えば、浙江省立水産学校は1934年に閉校し、1935年には水産試験場になった<sup>109)</sup>。広東の水産試験場は成立して2年間も経たずして閉鎖してしまった<sup>110)</sup>。

一方、水産界において活躍した人物の大多数は日本の農商務省水産講習所での留学経験を有した水産人材であった。彼らの活動について民国期の雑誌・新聞を調べると、附表のとおり、農商務省水産講習所を卒業した中国人留学生の名前が頻繁に出現する。彼らの履歴から見ると、多くは中国水産界の中核といえる。

なぜ沿海各地の水産学校は水産界のリーダー的な人材を育成する能力を持てなかったのか。また漁業の現場で活動する漁民たちにいかに新しい漁撈・養殖技術を普及したのか。1930年前後、中国の水産業および水産教育界が直面していた諸問題は、稿を改めて論ずることにしたい。

附表 農商務省水産講習所を卒業した中国人の留学生

| 氏名  | 卒業年度 | 専門   | 中国の出身学校                           |
|-----|------|------|-----------------------------------|
| 黄桂芬 | 1903 | 缶詰専修 |                                   |
| 趙楣  | 1906 | 缶詰専修 |                                   |
| 陳非  | 1908 | 製造   |                                   |
| 曹文淵 | 1908 | 製造   |                                   |
| 王文泰 | 1910 | 漁撈   |                                   |
| 孫英  | 1910 | 製造   |                                   |
| 張鏐  | 1910 | 製造   |                                   |
| 林元良 | 1911 | 漁撈   |                                   |
| 李士襄 | 1911 | 漁撈   |                                   |
| 伍正名 | 1911 | 製造   |                                   |
| 胡濬泰 | 1911 | 製造   |                                   |
| 劉彭  | 1915 | 養殖   |                                   |
| 陳謀琅 | 1921 | 養殖   | 江蘇省立水産学校 (第二世代)                   |
| 陳椿寿 | 1921 | 養殖   | 江蘇省立水産学校 (第二世代)                   |
| 張元第 | 1922 | 製造   | 直隸省立甲種水産学校 <sup>111)</sup> (第二世代) |
| 呉毅  | 1922 | 漁撈   |                                   |
| 鄧騰裕 | 1929 | 漁撈   | 集美高級水産航海部 <sup>112)</sup> (第三世代)  |
| 張榮昌 | 1929 | 漁撈   | 集美高級水産航海部 (第三世代)                  |
| 陳維風 | 1930 | 漁撈   | 集美高級水産航海部 (第三世代)                  |
| 巫忠遠 | 1930 | 漁撈   | 集美高級水産航海部 (第三世代)                  |
| 黄文澧 | 1930 | 漁撈   | 集美高級水産航海部 (第三世代)                  |
| 王貽觀 | 1936 | 漁撈   | 河北省立水産専科学学校 (第三世代)                |

1898年から1937年間の『水産講習所一覽』、1915年編『江蘇省立水産学校之刊第一刊』、1934年編『河北省立水産専科学学校一覽』、1936年編『河北省立水産専科学学校一覽』、1948年編『集美学校編年小史』により作成。

註

- 1) 佐々木貴文『近代日本の水産教育——「国境」に立つ漁業者の養成』（北海道大学出版会、2018年）89頁。
- 2) 同上、62～67頁。
- 3) 影山昇「明治期におけるわが国水産教育の史的展開過程——水産伝習所と水産講習所」（東京水産大学研究報告編集委員会編『東京水産大学論集』第25号、1990年）50～52頁。
- 4) 佐々木前掲書、120～121頁。
- 5) 国雄行『博覧会と明治の日本』（吉川弘文館、2010年6月）188頁。
- 6) 徐保安「清末官員海外遊歴遊學的歴史考察」（『中国高校社会科学』2016年06期）104～117頁。
- 7) 楊峻懿「清末民国期の水産教育と直隸水産講習所」（京都大学大学院人間・環境研究科社会システム研究刊行会『社会システム研究』第22号、2019年）235頁。
- 8) 国前掲書、189～193頁。
- 9) 侯朝海『中国水産事業簡史』（上海人民出版社、2016年）45頁。
- 10) 1927年、国民政府は大学区制を実施し、江蘇省立水産学校を国立第四中山大学農学院附設水産学校と改名、また1928年に国立中央大学農学院水産学校と改名した。1930年に江蘇省教育庁の管轄となり、再び江蘇省立水産学校にもどった。学校は呉淞口に所在したため、呉淞水産学校とも称された。本稿ではすべて江蘇省立水産学校に統一する（『上海漁業志』上海社会科学院出版社、1998年、371頁）。
- 11) 李士豪・屈若攀『中国漁業史』（商務印書館、1937年）。
- 12) 侯前掲書。
- 13) 張宝樹『中国漁業』（中華文化出版事業委員会、1954年）。
- 14) 張震東・楊金森『中国海洋漁業簡史』（海洋出版社、1983年）。
- 15) 従子明・李挺『中国漁業史』（中国科学技術出版社、1993年）。
- 16) 江蘇省立水産学校編『江蘇省立水産学校之刊第一刊』（1915年、上海海洋大学蔵）、『江蘇省立水産学校第一刊』入選上海首批檔案文献遺産』<https://www.shou.edu.cn/2013/0608/c147a23175/page.htm>（2020年11月30日閲覧）。
- 17) 江蘇省立水産学校編『江蘇省立水産学校記念冊』（1922年、上海海洋大学蔵）。
- 18) 侯前掲書、45頁。
- 19) 水産講習所編『水産講習所一覽（自明治三十六年七月至明治三十七年六月）』（1904年）92頁。
- 20) 同上、14～15頁。
- 21) 水産講習所編『水産講習所一覽（自明治三十七年七月至明治三十八年六月）』（1905年）98頁。
- 22) 楊前掲論文、237頁。
- 23) 水産講習所編『水産講習所一覽（自明治四十二年七月至明治四十三年六月）』（1910年）130頁。
- 24) 1912年、袁世凱に江蘇都督に任命された。程徳全は張謇と密接な關係を有していた（『高鐘・高鵬『民国元勳程徳全』「一、程徳全与張謇の交往」江蘇大学出版社、2016年、198～204頁）。
- 25) 「新紀元元年、鏐奉江蘇都督程公令籌辦是校。時主持省教育行政者、視水産為吾国破天荒之新事業、而財力亦足以副之。故籌備兩月而招生、開辦三月而建屋。預計四年之間漁撈・製造二科設備完全、由第六年起增設養殖科。不幸遭時多故、繼任省教育行政者雖尽心維持、限於財力、而鏐亦不得不犧牲固有之計畫。其得有此区区之設備者、固已竭省政府維護之力矣」（前掲『江蘇省立水産学校記念冊』）。
- 26) 前掲『江蘇省立水産学校之刊第一刊』。
- 27) 「窃本校本年開辦本科第一年級、本應漁撈・製造各設主任一員。当以我国漁撈人才供職在京、經校長

再三函商、均以部務重要為辭。嗣以第一年所授課程、系為水產普通学科。即由校長偕同製造主任勉為分任。惟轉瞬即為第二年開始之期、課程重要、且多實習、亟應聘定主任、分課教授。斷非校長等所能兼任、此為本校漁撈主任一職不得不添設之原因也。若以覓人不易、再不添設、則是科幾同虛設。……維有懇請鈞座俯念我國講求水產、方在萌芽、而本省此項人才尤為缺乏、可否准予咨商農商部將現任技士李士襄調充本校漁撈主任之職、以宏造就」(同上、「詳巡按使請咨商農商部請將技士李士襄調充漁撈主任文」、1914年12月5日)。

- 28) 楊前揭論文、237頁。
- 29) 同上、243頁。
- 30) 前掲『江蘇省立水產學校之刊第一刊』。
- 31) 「本校為甲種水產學校之一種、以教授水產上之學理、而研究其實驗上之技能者也。蓋整理經濟、首重製造。而我國沿海七省經營是業者、墨守慣例、不知變易。外貨日增、本品阻滯、漏卮外溢、深為遺憾。故對於當業者之子弟或有志經營者教授綱領」(同上、「計畫書六・實習計畫」)。
- 32) 水產講習所編『水產講習所一覽(自大正三年七月至大正四年六月)』(1915年)10頁。
- 33) 李士豪・屈若騫前掲書、170~175頁。
- 34) 「蓋將來卒業本校之學生、若僅為甲種實業之程度、則出而任事智識學歷實覺不敷於用、而僅使任低級之工頭水夫長等職務、勢又有所未宜……故鑠所對於本校之計畫、以為此時當先立專業之基、而將來必造成專門之器」(前掲『江蘇省立水產學校之刊第一刊』『本校五年間計畫書』)。
- 35) 同上。
- 36) 「本校招收豫科生七十名、民國二年正月開學、夏假後升人本科、本科定三年卒業。資格：以年在十五歲以上高等小學卒業或与之有同等學力者為合格。考試科目為國文、英語、數學、理科。學費及舍費免收。膳費每月四元」(『申報』1912年12月1~10日に掲載の募集要項)。
- 37) 前掲『江蘇省水產學校記念冊』『江蘇省立水產學校十年大事表』。
- 38) 水產講習所編『水產講習所一覽(自明治四十三年七月至明治四十四年六月)』(1911年)23頁。
- 39) 前掲『上海漁業志』371頁。
- 40) 「江蘇省立水產學校招考」(『申報』1914年1月13日)。
- 41) 前掲『上海漁業志』371頁。
- 42) 楊前掲論文、238~240頁。
- 43) 水產講習所編『水產講習所一覽(自大正三年七月至大正四年六月)』(1915年)11頁。
- 44) 楊前掲論文、238~240頁。
- 45) 水產講習所編『水產講習所一覽(自大正三年七月至大正四年六月)』(1915年)11頁。
- 46) 前掲『江蘇省立水產學校之刊第一刊』。
- 47) 同上。
- 48) 水產講習所編『水產講習所一覽(自大正三年七月至大正四年六月)』(1915年)10~14頁。
- 49) 「漁業の整頓に対する意見」(『南支那及南洋調査(支那の漁業)』第94輯、台灣總督府官房調査科、1925年)46~47頁。原文は王棠「對於整頓中國漁業之管見」(『申報』1924年6月15日)。
- 50) 「養殖選種、是為難事、偶不審慎、繁殖難而種亦雜。是以此種學術非研究有方、深有心得者、斷不能勝任。在東同學卒業者尚無其人、苟內地有人、儘可同時併辦、否則寧缺一科以待將來」(前掲『江蘇省立水產學校之刊第一刊』)。
- 51) 「吳淞省立水產學校開辦時、原定計畫分漁撈、製造、養殖三科。嗣以養殖一科教才缺乏、延未舉辦。民國六年、該校第一屆學生卒業、選派卒業生陳椿壽、陳謀琅赴日本水產講習所專習養殖。迄今三載、業已卒業先後回國。該校擬定規程、呈奉省署於本年秋季招收新生時添招養殖科一級。該校漁撈、製造二科成績素著、現辦養殖科將來養漁方面必大有希望、水產前途頗抱無窮之樂觀也」(「水產學校開辦養

殖科」『申報』1921年4月29日)。

- 52) 陳椿寿・陳謀琅「江贛各地水産養殖報告」(江蘇省立水産学校校友会『水産』「調査」第4期、1922年) 1~17頁。
- 53) 「江蘇省立水産学校招生」(『申報』1922年7月12、15、18、21、24、27、8月2、5、8日)。
- 54) 前掲『江蘇省立水産学校記念冊』「江蘇省立水産学校十年大事表」。
- 55) 同上。
- 56) 楊前掲論文 244頁。
- 57) 前掲『江蘇省立水産学校記念冊』「江蘇省立水産学校卒業状況表」。
- 58) 前掲『江蘇省立水産学校記念冊』「校友録」3~9頁。
- 59) 同上、1~3頁。
- 60) 楊前掲論文、表6「直隸水産学校の卒業生のうち水産関係の職業に従事した者」244~245頁。
- 61) 前掲『江蘇省立水産学校記念冊』「江蘇省立水産学校卒業状況表」。
- 62) 「籌備之初、鑄認定学校成績不在校内、而在校外。苟十年以后、將卒業生事業立成一表、謂某也辦某漁業公司、某也辦某製造工廠、則此寥寥数字、已大可表暴吾校之成績矣。及今已屆十周、卒業生之能効力於実業者、僅得什二、而投身教育界者反過之。推其原因、倡辦事業者宜責儲專門人才、而吾校学生之程度・年齡均不足以副此。雖所授学科有時超過中等範圍、終不能受以完全之專門學術。社会中無固有之事業、而卒業生有倡之能力者又鮮。学校与社会不適應」(前掲『江蘇省立水産学校記念冊』)。
- 63) 吳淞水産学校昨日全体学生、忽將大門緊閉、不許出入。校門口懸有白布、上書「否認校長張公鏐・教務長沙玉嘉・不達目的・誓不開課・不自由毋寧死」字樣。另發伝單、併將校中電話線割斷、所有教職員加以看禁。入晚、電灯亦不明。其原因為前日校中開除無錫学生侯匯瀛、学生要求收回成命、醞釀多日、至昨日乃決裂。現張校長已赴上海省教育會報告情形(「吳淞水産学校發生罷課風潮因開除学生而起」『申報』1924年6月19日)。
- 64) 「吳淞水産学校風潮六志」(『申報』1924年6月24日)。
- 65) 「吳淞水産学校風潮八志」(『申報』1924年6月26日)。
- 66) 同上。
- 67) 「吳淞水産学校風潮昨聞学生已出吳署校長電省辭職」(『申報』1924年6月30日)。
- 68) 同上。
- 69) 「吳淞水産学校風潮解決 開除学生十一人」(『申報』1924年7月23日)。
- 70) 「鄙校校長張鏐、辦理十余年、毫無成績、校務廢弛。其罪不可勝誅、筆難罄述」(「吳淞水産学校發生罷課風潮因開除学生而起」『申報』1924年6月19日)。
- 71) 「窃視学奉令調查水産学潮、詳加採訪、徵求事实。知該校学潮之最大原因在、歷年卒業生応用無多、出路太少、在校学生、均有不能滿足希望之缺憾」(「水産学校改組之省令另任馮立民接充校長」『申報』1924年7月30日)。
- 72) 同上。
- 73) 對於該校善後辦法、認為有改組之必要。……查馮校長前在集美学校、辦理水産教育、頗著成績。本厅长為学校招人計、經一再敦請、始勉允暫時担任。乃該生等不諒苦衷、任意宣言搗乱、苟非別有作用、何至逾越範圍至此?須知該校此次發生風潮、關於該生之學業及該校之名譽・前途、所犧牲者甚大。及今痛自改悔、猶可挽救於桑榆(「關於吳淞水産学校之文件」『申報』1924年8月8日)。
- 74) 陳嘉庚「十九添辦水産航海学校」(『南僑回憶録』南洋印刷社、1946年) 9頁、林斯豊『集美学校百年校史(1913~2013)』(厦門大学出版社、2013年) 23頁。
- 75) 『集美学校編年小史』(集美学校校董會出版、1948年) 3頁。
- 76) 「侯朝海履歷登記表」(1952年、上海海洋大学藏)。

- 77) 前掲『集美学校編年小史』8頁。
- 78) 同上。
- 79) 同上。
- 80) 「水産学校定期追悼張公鏐」(『申報』1925年4月1日)。
- 81) 「侯朝海：全面交代書」(1951年、上海海洋大学藏)。
- 82) 同上。
- 83) 前掲「侯朝海履歷登記表」。
- 84) 「吾国海岸綿長、海産豊富。沿海各省、近雖有設立水産学校及少数漁業試驗場所、從事研究技能學術、而對於遠洋漁業、大都以設備未周、猶不克實施教練、以致漁權傍落、海利難収。晚近各界明達人士、集資創辦遠洋漁業者、頗不乏人、祇以人才缺乏、深感困難。弊校有鑒於此、定於本年秋季、開辦遠洋漁業專修科、專以造就上項急需人才」(「水産学校將開辦遠洋漁業科」『申報』1926年1月12日)。
- 85) 佐々木前掲書、147頁。
- 86) 同上、149頁。
- 87) 劉利民「日本越界侵漁与国民北京政府的应对(1924~1927)」(『抗日戦争研究』2013年第3期)127頁。
- 88) 同上、128頁。
- 89) 「吳淞水産学校近聞」(『申報』1928年9月13日)。
- 90) 楊前掲論文、246頁。
- 91) 同上、248頁。
- 92) 陳同白『從事漁業工作五十年』(中国水産協会、1977年)8~13頁。
- 93) 同上、17頁。
- 94) 吳天仁編『台湾早期漁業人物志』(台湾省漁業局、1996年)8頁、陳前掲書、19頁。
- 95) 二十二日下午二時、中華民國水産学校連合会、在吳淞水産学校開成立大会。到會者、農商部代表王文泰、江浙漁業事務局代表李士襄、江蘇実業庁代表周監殷、江蘇省立水産学校代表侯朝海・陳同白・陳椿壽、浙江水産学校代表陳謀琅、福建集美学校水産部代表馮立民・吳子熙、其他直隸山東奉天等校代表不及到會。先行推举侯朝海君為臨時主席、報告該会籌備情形。次由農商部代表王文泰致詞、略謂吾国之有水産学校、以直隸為最先、次為江蘇、浙江、福建、奉天又其次、山東水産学校以戰局而未見發達、其他各校、均積極進行、不遺余力、成績均有可觀、将来大有希望、水産業前途、至為可賀。惟我国水産業目下尚屬幼稚、与東西各国相較尚難望其項背。此則希望貴会、諸同志之所当努力奮闘者也(「水産学校連合之成立会」『申報』1926年8月24日)。
- 96) 「水産学校之大連合」(『実業雜誌』1926年第11期)。
- 97) 孫善根『浙江近代海洋文明史(民国卷)第二冊』(商務印書館、2017年)286頁。
- 98) 同上。
- 99) 同上、287~289頁。
- 100) 浙江省立水産科職業学校編「浙江省立水産科職業学校通訓録」(『浙江省立水産科職業学校校刊』中華書局、1930年4月)32~33頁。
- 101) 楊前掲論文、248頁。
- 102) 1900年、浙江省生まれ、1921~1923年に東京帝国大学で動物学を学び、1934年に再び日本に赴き、東北帝国大学で魚類生理学を学んだ(陳德源『中国現代海洋人物志 第一集』海洋出版社、1985年、276頁)。
- 103) 「中国各水産学校及試験場の設備簡陋出乎意想之外。一個有歷史的学校、試験漁船尚且没有、科学儀器更談不到。但是這也不是学校或試験場当局的過處、還是要歸咎於經費不足和開辦時没有充分的準



備」(費鴻年「對於中国水産研究指導機関の意見」『中国建設』水産専号(下)、第3巻第4期、1931年、25頁)。

104) 李士豪・屈若攀前掲書、132頁。

105) 「各省辦理水産教育多年、嗣業学生雖多来自沿海各県、属漁家子弟者实属少数。其教育結果祇對於沿海区域中等社会以上之子弟授以水産学識。能得練習漁撈技術、從事新式漁法の採行者甚占少数、而多数因習慣、体格、觀念等關係不能從事漁業。故欲貫徹将来水産事業的發展、務兼注重關於漁民的教育」(侯朝海「中央及各省应有之水産教育設施」『中国建設』水産専号(上)、第3巻第3期、1931年、50頁)。

106) 前掲『江蘇省立水産学校記念冊』。

107) 前掲「對於中国水産研究指導機関の意見」25頁。

108) 前掲「中央及各省应有之水産教育設施」47頁。

109) 李士豪・屈若攀前掲書、135頁。

110) 広東省地方史志編纂委員会編『広東省志・水産志』(広東人民出版社、2004年)69頁。

111) 1910年に創設された直隸水産講習所は1914年に直隸省立甲種水産学校と改められ、1929年10月に河北省立水産専科学校に改名された(楊前掲論文、237、248頁)。

112) 1925年、集美学校水産科は集美高級水産航海部と改名した(前掲『集美学校編年小史』8頁)。